

I はじめに

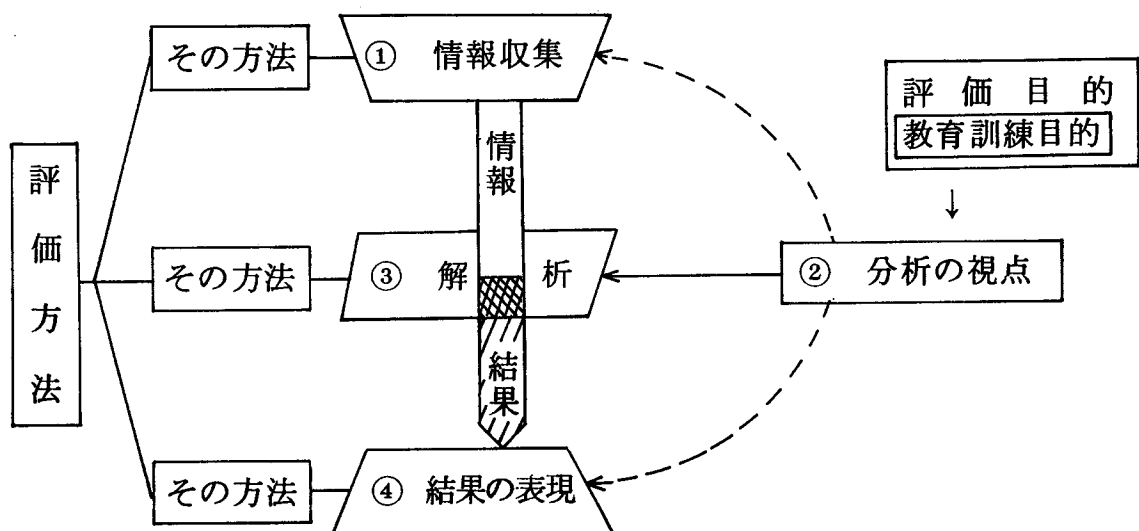
ビデオ機器の普及によって、企業内訓練、および公共職業訓練において、ビデオ教材を授業にとり入れやすくなってきた。

ビデオ教材は、一般に、市販の教材を用いることが多いと思われる。しかし、市販ビデオ教材では、特定の教育目的に適合せず、ビデオ教材を自作して、教育訓練の効果を高めようとする動きがでてきている。

しかしながら、よりよいビデオ教材を自作するにはどうしたらよいか、その十分な検討がなされているとは思われない。特に、自作ビデオ教材の“できばえ”を決め、その教材の改善点を見いだす方法については、ほとんど検討はなされていない。¹⁾ また、自作ビデオ教材を授業に導入した時の効果をみる方法も確立されているとは言えないだろう。そのために、自作ビデオ教材が、いわゆる“作りっぱなし”“見せっぱなし”になっていることも多いと思われる。

自作ビデオ教材の“できばえ”および、ビデオ教材を授業に導入する効果を見るには、次のようなプロセスがとられると考える。これは、いわばビデオ教材自体の評価、あるいは授業へのビデオ教材の導入効果についての評価といえよう。

表 1. 評価の構造



このプロセスは次のようにとられる。つまり、

- ① 評価を行うための情報を収集すること。
- ② 教育訓練の目標とのかかわりで、評価のための視点を持つこと。
- ③ あらかじめ定めた分析の視点より、評価のための情報を解析すること。
- ④ 解析した結果を、適切な形式で表示すること。

そこで、本研究では、企業内の研修用に自作ビデオ教材を制作するにはどうすればよいのか、また授業にそれを導入するにはどうすればよいのか、という相談を、ある企業からうけたことに機会を得て、自作ビデオ教材制作の一連のプロセスに、評価研究を加えることにした。つまり、この一連のプロセスで、自作ビデオ教材の“できばえ”を決めるための、情報収集の方法を中心に、(表1の①を中心に)検討をする。そして、この研究の具体的目標を、次の2点とした。

1. 自作したビデオ教材自体の“できばえ”がどう受けとめられるか、全体的な印象をつかみ、さらに、ビデオ教材の設計変量にかかわる要件について、ビデオ教材をどのように改善すればよりよい教材になるか、を検討する。
2. 自作ビデオ教材を授業に導入したことが、受講者、ならびに授業担当者にとって、“よかった”のかどうか、その意味を含めて検討する。

さらに、このような検討を通じて、次の点を考察する。

- イ. どのような方法で自作ビデオ教材の“できばえ”を決め、そして、改善点をみいだすための情報をどのように収集すればよいのか。
- ロ. 自作ビデオ教材制作の一連のプロセスに、評価者がどのように参画すればよいのか。